

Title	巻頭言 : 看護を大学で学ぶということ
Author(s)	石本, 章子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 1999, 5(1), p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56723
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

巻頭言

看護を大学で学ぶということ

LEARNING NURSING AT UNIVERSITY

昭和 27 年に日本で最初の看護系大学が設立されて以来、多くの看護教育従事者がその増設に努力を重ねたにもかかわらず、平成 4 年までの設立は学部でもわずかに 10 校に過ぎなかった。それが平成 4 年から看護系大学設立の気運は急速に高まり、平成 11 年度中には、学部だけでも 100 校に迫ろうとしている。

今回の変革は、自らの努力で勝ち取った結果とは言い難いために、将来展望が明確でなかったり、看護教員の確保に多大なエネルギーを消耗するなどの本末転倒も起こりかねないが、最終学歴が専修学校のため修士課程への進学はおろか大学への編入学の道さえ閉ざされていた看護婦にとっては朗報である。さらに、専修学校卒業生の大学編入学制度が開かれるなど、看護婦により高度な学習の場が提供されたのは嬉しいことである。

第二次大戦後、米国の占領政策下で看護制度が検討されたとき、高等女学校卒業を入学資格とし、将来は大学に発展させる展望をもった教育制度が提示されたが、日本の現状に合わないとのことで現在の制度が発足したといわれる。それから 50 年にしてようやく看護婦のための大学教育が緒についた訳で、実に永い歴史であった。

看護を大学で学ぶことの第一の利点はやはり学歴であろう。一般社会の高学歴化の中で、看護を選択する者のごく少数にしか大学進学の手がかりが与えられなかった。そのため、向学心に燃えた看護婦は、専修学校卒業という学歴にある種の負い目を以て、学位や修士取得にエネルギーを費やさねばならなかった。しかし、看護系大学の増加による学歴取得によって看護婦は、ようやく専門職に伍するための必要条件を備えたといえよう。

次に大学で学ぶこと自体の意味が大きい。12 世紀後半にイタリアのボローニャに世界最初の大学が出現したとき、勉学への情熱に燃えていた学生の「学ぶこと」への渴望が、教師の「教えること」への情熱をはるかに凌駕していたので、学生が大学を支配して教師を従属させ、教師は「荣誉ある従属」に甘んじていたといわれる。現在の学生にそのような情熱があるかは別として、看護学を目指す学生たちは、単なるモラトリアムではなく目的を以て選択している。そのような学生が、大学の環境とフィロソフィーの元で、「看護学」を学ぶことの意味は、近い将来看護の世界に還元されるものと期待している。

21 世紀は女性の時代であるといわれる。スイスで女性大統領が誕生し、米国でもその可能性があると聞く。変貌する医療環境にあつて、女性が大多数を占める看護婦にも従来とは異なった重要な役割が期待されることになる。そのような中で、一部の選ばれた人たちが男性と伍していただくだけでなく、自然体で医療社会の重要な位置を占めることができる看護婦が増えて初めて、看護を大学で学ぶことの意味が明らかになるであろう。

平成 11 年 1 月

大阪大学医学部保健学科

看護学専攻主任 石本 章子